

# 選者特選賞

鴫田智哉選

びろびろとアロハ煽りて風の行く

田村裕子

阪西敦子選

緑蔭を中へ外へと芝手入れ

永井恒子

鎌田 俊選

恐竜も診みますと獣医青嵐

齊藤保志

高柳克弘選

カラオケのドアから漏るる卒業歌

潮見悠

# 入賞作品

## 大賞

鎌田俊準特選 鵜田智哉・高柳克弘優秀句

白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一

## 大田黒公園賞

鵜田智哉準特選 高柳克弘優秀句

昔日の校歌のかたち雲の峰

豊島月舟齋

## 杉並区俳句連盟賞

高柳克弘準特選 鵜田智哉優秀句

スーパ―の少し冷たい桜もち

竹内静江

阪西敦子準特選 鎌田俊優秀句

梅雨晴れのアヒルボートの胸に数

塚本桜魚

# すぎなみ詩歌館賞

阪西敦子準特選 鎌田俊優秀句

蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫

紺野果倫

鎌田俊準特選 阪西敦子優秀句

春愁やふるえて走りだすバスは

竹ノ内ひとみ

# 鴫田智哉選

特選

びろびろとアロハ煽りて風の行く 田村裕子

ばさばさでも、はたはたでもない。びろびろ、が絶妙。肌から生地が離れて震えるさまが、ありありと感じられる。けっこう強い風だろう。風、を主語にしたことで、アロハシャツの様子が浮き彫りになるのもいい。

準特選

歌の名を由来に長閑なるわたし 山本たくみ

由来、という言葉に、私はゆかしさを覚える。何という名の歌なのだろうと。もしかすると、わたし、の名がノドカさんなのかもしれないけれど。そんな想像も含め、歌、というものに導かれる穏やかな心が伝わってくる。

歌を追ふ冷たき指のありにけり 矢野美智子

人差し指で、歌、の音符を追っているのだろう。歌、が紡ぎ出す時間に沿い、指、は横へ滑ってゆく。もとより音符と歌とは別のものであるけれど、その間を繋ぐのがこの、ひとりで滑っていく、冷たい指、なのだろう。

一つ家に時差ある暮し桜餅 近田薄氷

一つ家、にいなながら、一人ひとりに仕事や、学校や、家のことといった時間割が違っている。ある日その家に、桜餅、が介在した。家族一人ひとりの心にもついている明かりのように、桜餅、がほんのりと優しい。

# 坂道で子の手は離れ冬紅葉

原田晴美

私は、上り坂のような気がした。それまで手を繋いで一緒に歩いてきた、子が、が不意に何かを見つけて、一人で先へと歩き出したのではないだろうか。子、はいつか離れていく。冬紅葉、の淋しさと温かみが心に残る。

# 昔日の校歌のかたち雲の峰

豊島月舟斎

昔日、とあるから、ずっと前の、思い出の校歌だろう。校歌、とその頃の自分の生を思うと、象徴的に、雲の峰、がイメージとして立ちあがるのではないだろうか。そしてそれが、この人にとっての、校歌のかたち、なのだ。

## 優秀句

暗号を「受信中」です蝸牛

小山泰子

炎熱やサンバを踊るへそとへそ

瀧田光雄

オルガンの尾を引く音色春愁ひ

加藤悦子

恋文はA Iの作虎が雨

富永志保子

スーパ―の少し冷たい桜もち

竹内静江

鼻歌の背泳ぎすこしづつ曲り

前田拓

轆かれ裂けパイロンさらに朱い秋

株高利之

二人居に掌ほどの鏡餅

早坂洋子

松葉杖を置いて一歩や愛鳥日

山本和子

もつれあふ糸のほぐれず星の歌

松井宏文

立体の渋谷に迷ふ春の風

山口明子

遠くまで飲みに行くなり秋日和

高橋明夫

歌を吐く汗はマイクに伝わって

伊藤菖蒲

君が代を歌ふ異国のラグーマン

松井宏文

子の名前薄れし鞋や大夏野

田中有楽

紫陽花の歌声じっと聞いている

田口直哉

順を待つ手の白菊の確かなり

大友まりえ

白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一

曝す書に師の鉛筆のありありと

牧やすこ

美術展窓を外して搬出す

丹沢借景

# 阪西敦子選

特選

緑蔭を中へ外へと芝手入れ

永井恒子

樹下に広がる芝の手入れは、暑い日も、いや草も成長の早い季節こそ欠かすことはできない。日の下に出たり、緑蔭に体の端を染めたり、不規則に緑蔭を出入りしながら、時に涼み時に涼しさを手放しつつ続く手入れ。

準特選

蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫

紺野果倫

老猫、あるいは病気だろうか、その性に反して、もう何かをねだることもなく、衰弱した猫なのである。蒲公英は今、猫を包むのか、思い出の中にあるのか。低い黄色の花が、猫のかすかな希望をあたたかく包む。

新茶汲む奥の急須を出しにけり

野村宣子

新茶を淹れるときの、何気ない動作を描いた。香りや味はもちろん、目にも美しい新茶を、間違えなく入れるために、奥にしまっていた普段は使わない急須を出す。その動作も含んだ新茶の心浮き立つ様子。

梅雨晴れのアヒルボートの胸に数

塚本桜魚

アヒルボートの数字は、今、急に書かれたものではないだろう。梅雨の間、あまり目を向けて来ず、あるいは出番がなくなってしまうれていたボートを久しく見て、ふと気づいた感慨。アヒルのほうも何か漲っているようだ。

# 立春のスリッパ脱げる記念館

山口汀子

厳しい冬が一応の終わりを迎え、これから明るくなっていく最初の一日。その逸る気持ち、または安堵のためだろうか。記念館という少しきちんとした場所のスリッパに起こるほつれが、また春の気持ちに沿う。

## 草むしり土偶のごとく休息す

松浦道夫

夏にこそ草は成長し、その季節にこそ必要な草むしりだが、その逃げ場のない暑さはどうしようもない。「土偶のごとく」という大胆な比喩が表す、うづくまる姿勢、半眼、動きの少なさに宿るおかしみ。

## 優秀句

アイリスの一茎折れて雨あがる

渡邊昭子

アルバムのスカート白き桜桃忌

國田鮭児

いつのまにクロッカスの芽のあかるさよ

山口汀子

海染める入日へ鳶の冬至かな

木田和子

エプロンをきりり締め上げ朝曇

春彩

炎熱やサンバを踊るへそとへそ

瀧田光雄

きのふよりけふの深さや木下闇

竹之内京子

鍵盤の小指に終はる卒業歌

前田拓

春愁やふるえて走りだすバスは

竹ノ内ひとみ

立葵ふらり立ち寄るよその猫

紺野果倫

朴散華人の恋路を見てしまふ

岡本葉子

夕顔のひらきて話す人もなく

貫井知子

冷房の遠くて耳飾りふんわり

竹ノ内ひとみ

遠くまで飲みに行くなり秋日和

高橋明夫

夏の川歌碑は一文字欠けている

伊藤菖蒲

犬小屋の片付けられし夏木陰

山内禎祐

初雪や試し書きするボールペン

平野恭子

大鍋に年越蕎麦の滾りけり

大本恵子

微かなる夫の鼻歌胡瓜もみ

平野恭子

絨毯の毛足に沈む歌留多かな

潮見悠

# 鎌田俊選

特選

恐竜も診ますと獣医青嵐

齋藤保志

恐竜は、白亜紀に絶滅した爬虫類の総称なので、爬虫類を扱う獣医からすれば、診察の対象となりうるのだらう。窓外の青葉が強い風に吹かれている。病院の噂を聞きつけた恐竜が受診に訪れたかのような気配が一句にただよう。

準特選

春愁やふるえて走りだすバスは 竹ノ内ひとみ

日が明るく心の浮き立つ春なのに、とらえどころのない憂いや哀しみを覚えることがある。日頃はなんとも思わないバスの走り出しの光景を捉えて、動力の伝達するさまに感じ入っている作者がいる。

ステテコの父は海馬に住みたまふ 小笠原黒兎

海馬は、記憶の司令塔とも言われる器官で、短期記憶から長期記憶へと情報をつなげる。夏の暑い盛りになると、ステテコ姿の父親を懐かしく思い起こすのだらう。記憶の中の父を、海馬に住んでいると表現している。

清明や産湯をはじく嬰の肌 田中みどり

嬰兒を抱いたよろこびを格調高い生命讃歌の一句にまとめている。清明は四月五日頃で、天地の気がすがすがしく満ちてくるときという。産湯で浄められた嬰の姿に、一種の聖性が宿る。

哲学を捨てて海月の透きとほる 小池とも子

哲学とは、これまでの人生経験に基づいた人生観や世界観、作者の理念であろう。海中を浮遊する透明な海月に、哲学に囚われない融通無碍の精神を感得した象徴詩である。

## 白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一

夏の盛り、白玉の白さ、冷たい食感の涼味にふっと一息をつく。娘と話す内容は、おのずと妻の思い出に及ぶ。娘にとっては母親であるが、妻として母として語られる一人の女性のエピソードと、白玉の取り合わせが甘く切ない。

優秀句

アイリスの一茎折れて雨あがる

渡邊昭子

青胡桃旧家に男児誕生す

朝倉さき子

秋の風馬の横腹あたたかし

竹内静江

甘酒や生き長らえて百一歳

山村笑流

オルガンの尾を引く音色春愁ひ

加藤悦子

柏餅明日が無限にあつたころ

近田薄氷

風かおる小鳥の歌も草も木も

坂井夫美子

画布に置く雲一刷毛や麦の秋

北原孝子

蒲公英やもう何も欲しがらぬ猫

紺野果倫

薫風や鬘編んで競技馬

荒井八千代

搾乳を待つ牛の目に二重虹

宮崎梅電

台風と一夜の酒を酌み交す

善如寺陽子

梅雨晴れのアヒルボートの胸に数

塚本桜魚

春めくやシャンプーあとの蒸しタオル

藤田正子

人は皆誰その子たりつくしんぼ

青木喜代江

ひとりなら風喰う昼餉大花野

田中有楽

蛍火やいまならごめんねと言へる

赤坂奈緒

乳母車春のひかりを積んでいく

真田正

葉桜やハミング洩るる保健室

大本伸彰

立ち漕ぎの少年限りなく夏へ

築山史子

# 高柳克弘選

特選

カラオケのドアから漏るる卒業歌

潮見悠

卒業歌を体育館ではなく、カラオケで仲の良い友達と歌っているというのが新しい切り口。季語を更新した句にはやはりインパクトがある。

準特選

十六むさし恋のはじまりとはならず 宮崎久寛

「ならず」と打ち消しているところで微笑が生まれる。幼い日の淡い思い出。

スーパーの少し冷たい桜もち

竹内静江

大量生産が当たり前になった時代の淋しさ。

新妻の名のほこらしき年賀状

早坂洋子

「ほこらしき」の直情的な表現がこの句では効いている。

夜学の灯消えて守衛の鍵の音

田中みどり

これからの秋の夜の深さが思われる。

支持率の折れ線グラフてふてふ来

生島融

蝶の飛ぶさまをユニークに表現。不穏な政治状況への批評も。

優秀句

朝焼けの寒村をぬけ弓稽古

竹内静江

紫陽花や言葉惜しまぬ人たらし

青木孝子

アトリエにモデルの使ふ白日傘

小川明宏

弟にひとつもやらぬ歌留多かな

前田拓

きのふよりけふの深さや木下闇

竹之内京子

茎立ちや三日つづきのとのぐもり

熊谷由美子

さくらんぼルビーの指輪欲しかつた

三上典子

たんぽぽや「さんぽ」歌へばもうおうち

赤坂奈緒

扉に狸お題狸と決まりけり

渡邊文雄

鳥越の雨の祭の手締めかな

宮崎久實

白木ムツキ権ケンやなんと優しい朝あさだろう

朝倉さき子

不眠はや七年けふも明易あやき

加藤柗介

万緑やスピードあげるハイウエイ

山田和子

葦簣アシごし披講ひこうの声の通りくる

牧やすこ

花すぎの雨に動かぬ亀の首

原田伸之

江ノ電に手を振る子らの夏帽子

広田妙子

昔日の校歌のかたち雲の峰

豊島月舟齋

鳥歌い雨上がり知る立夏かな

川津景子

冬隣り食卓よぎる鳥の影

生島融

白玉や娘と語る妻のこと

齋藤雅一